

対人援助職を目指す学生の高齢者観に関する一考察

学生の授業前後の高齢者イメージの変化

大 杉 あゆみ

Perceptions of the Elderly among Students wishing to become Personal Assistants : How their Image of the Elderly evolved during Classes

Ayumi OSUGI

要 約

本研究の目的は、福祉・心理を学ぶために入学した大学1年次生の「高齢者福祉」の授業前後の高齢者のイメージの変容について明らかにすることである。調査対象は75名であり、高齢者のイメージについて自由記述で回答を求めた。4月の初回授業で74名の学生、8月の最終授業で55名の学生から回答を得た。結果について、樋口（2004）が開発したテキストマイニングソフトKH Coder 3 Folderを用いてテキスト分析を行った。抽出語については、強制抽出語4以上をリスト化しWard法を用いた階層的クラスタ分析を行った。また、抽出語の関連性を分析するため、最小出現数を4、最小文書数を1、Jaccard係数を0.2以上に設定し、強制抽出語の共起ネットワークを作成した。

入学直後の高齢者のイメージは祖父母等の身近な高齢者の影響が大きいこと、高齢者を身体的側面にとらえ「身体」が「衰え」ること、「人生」の先輩であり、人生の「経験」や「知識」が「豊富」である等のイメージを持っていることを示している。最終授業後の回答は、「高齢」は「介護」「生活」と共起関係にあり、それぞれ「弱者」「守る」、「生活」「身体」へとつながっていた。また、「人生」には「生きがい」が求められ、高齢者特有のこれまでの「経験」による「知識」を「持つ」ため、「地域」「活動」を行っているイメージしていることが示された。その他、「良い」「暮らす」は「社会」につながり、高齢者の生活を「支援」することを「考える」思いを持っていることを示した。学生の高齢者のイメージは授業前後で変化があることが明らかとなった。対人援助職を目指す学生の高齢者観を発展させるために、教員は授業において学生の高齢者観を育む視点を意識することが重要であると考えられる。

キーワード：高齢者観、高齢者、イメージ、対人援助職

I. はじめに

日本の人口の高齢化率は上昇の一途をたどっている。総務省統計局によると2022年9月の推計で、65歳以上の高齢者人口は前年に比べて6万人増加し3627万人と過去最高となった。一方で、総

人口は減少しており、前年に比べて82万人の減少であった。高齢化率は前年28.8%から29.1%と更に上昇し過去最高を記録した。特に団塊の世代が2022年から75歳に到達し始めており、後期高齢者が全人口の15%を占めた。このように、日本では人口の高齢化が著しく、後期高齢者の増加は要支援高齢者の増加につながり、現役世代が高齢者を支える仕組みがより求められる社会になっていくことが推測されている。

超高齢社会となった日本において、高齢期になっても生きがいを持ち、誰もが豊かな生活を送ることが可能な環境や文化を築いていくことは、社会の大きな関心事でもあり、課題であると考えられる。社会全体の高齢者観はもとより、要支援高齢者の日常生活のサポートやこれに伴う相談業務を実践する専門職の高齢者観は、支援に取り組む姿勢として現れるのではないだろうか。このように考えると、将来援助職を目指す学生の高齢者観は、支援を受ける高齢者に何等かの影響を与えることとなり、養成課程在籍中に、高齢者観を深めることは重要であると思われる。

しかし、核家族化が進み、祖父母等との同居が少ない実情や、近隣のつながりの希薄化などに伴い、学生たちは祖父母も含め高齢者と深く交流する機会が以前に比べると減少している現状がある。このような背景で育ち、福祉・心理を学ぼうと希望するに至った学生の高齢者観はどのようなものだろうか。

本研究は、A大学 福祉・心理系学科で開講される「高齢者福祉」受講学生に高齢者観を問いかけ、その回答を分析し考察することを試みた。「高齢者福祉」では、高齢者の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉・介護需要等について、また、高齢者福祉制度の歴史的展開と近年の法制度、特に介護保険を中心に講義を実施した。配当年次は1年次前期である。当該科目は社会福祉士受験資格取得、介護福祉士受験資格取得において必須科目であるが、それ以外の学生も履修可能である。

本研究では、まず福祉・心理学を学ぶことを希望している学生の入学直後の高齢者に対するイメージを明らかにしたいと考えた。さらに、15回の高齢者福祉の授業を受け、どのようなイメージの変化があったのかについて明らかにしたいと考える。授業前後における学生の高齢者のイメージとその変化を読み解くことによって、将来対人援助職を目指す学生の高齢者観について考察してみたい。

Ⅱ. 先行研究

高齢者のイメージや高齢者観に関する研究を概観すると、看護師養成課程を対象とした研究が多く、学内授業の看護学生の高齢者イメージ変化への影響に関する研究（岡本ら、2011；山崎ら、2018）や、看護実習前後での高齢者イメージの変化（金原ら、2018；桑田・山本、2022）等がある。看護学生に関する先行研究からは、授業や実習を通して高齢者のイメージの記述が増え、イメージの幅が広がったことや、高齢者に対して肯定的な捉え方が増え、高齢者観の変化が見られたことが示唆されている。

しかし、社会福祉士、介護福祉士を目指す学生の高齢者観に関する研究はまだ数が少ない。看護師同様に、例えば、高齢者福祉施設における生活相談員や直接的に生活支援を担うケアスタッ

フ等の高齢者観も重要であることから、これらの対人援助職を目指す学生の高齢者観を明らかにすることは意義あることだと考える。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象者

A大学で1年次前期に開講する「高齢者福祉」を受講した学生のうち、1年次生履修者75名のみを対象とした。

2. 調査日時

調査①：初回授業 2022年4月7日

調査②：最終授業 2022年8月4日

3. 調査方法

A大学1年次前期の履修科目である高齢者福祉の初回授業と最終授業において、出席者に対して研究の趣旨と同意のサイン記載欄、回答欄（自由記述欄）を設けた用紙を配布し、「あなたの高齢者のイメージ」について回答を求めた。

4. 分析方法

分析対象は、高齢者福祉を履修1年次学生75名のうち本研究に同意した学生であり、4月の初回授業で74名の学生、8月の最終授業で55名の学生から回答を得た。回収率は4月が98%である。最終授業は欠席者が多く、74%であった。結果について、樋口（2004）が開発したテキストマイニングソフトKH Coder 3 Folderを用いて、テキスト分析を行った。

分析方法の詳細は以下の通りである。まず、学生の自由記述回答をExcelに入力し、これらをデータとした。抽出語については、強制抽出語4以上をリスト化しWard法を用いた階層的クラスタ分析を行った。また、抽出語の関連性を分析するため、最小出現数を4、最小文書数を1、Jaccard係数を0.2以上に設定し、強制抽出語の共起ネットワークを作成した。

5. 倫理的配慮

調査実施時に学生に対して調査の趣旨と目的、調査への協力は自由意思であり、調査への協力の有無と回答内容は成績に影響がないこと、プライバシーの保護について文書と口頭で説明を行った。また、回答内容は研究と授業改善の資料とすることを説明し、同意書にサインをもらった。以上の手続きを行い、同意できた者を調査協力者とし、分析対象と設定した。

IV. 結果

1. 頻出語の分析

学生の高齢者のイメージに関する記述回答を分析対象ファイルとした。調査①初回授業のデータに前処理を実施し、総抽出語数が3559語、異なり語数が686語であった。調査②最終授業のデータも前処理を実施し、総抽出語数が3067語、異なり語数は546語であった。

学生が記述した「高齢者のイメージ」の頻出語のリスト（出現回数4回以上）を調査①については表-1に、調査②については表-2に示した。

初回授業における「高齢者のイメージ」では、「人」70回、「多い」37回、「イメージ」34回、「自分」23回、「思う」23回、「生活」17回、「必要」16回、「高齢」14回、「体」14回、「介護」12回、「弱い」12回、「病気」12回、「悪い」10回、「元気」10回、「認知」10回、「好き」「持つ」「足腰」「優しい」が9回だった。

最大頻出語は「人」、次いで「多い」、「イメージ」であるが、これらは「～な人が多いイメージ」等の記述をしている学生が多かったことにより自然と多く使用される語であった。

続いて「自分」は、「仕事を退職し、自分の趣味に没頭している」「足腰が弱くなって自分が思うように体を動かせなくなっていく」「自分の好きなものや車の免許、自分の過去などに対するこだわりが強い」等に使用され、特徴的な語とは言えなかった。

次に多い「生活」17回は、「生活がしづらくなって、一人での生活に不安がある」「介護が必要な人が多く、普段の生活にも苦勞し、大変なイメージがあります」などの記述であり、高齢になることで生活に何等かの変化が生じることを理解していることが窺えた。「必要」16回では「家族や周りの人のサポートが必要」「介護が必要な人が多い」などの記述であった。

KWICコンコーダンスで語句の具体的な使用方法について確認し、階層的クラスター分析、共起ネットワークの作図を繰り返し行う中で語の取捨選択を検討した。その結果、「人」「多い」「イメージ」「自分」「思う」「感じる」を使用しない語として選択した。これらの語以外の頻出語が表-1である。

調査②の最終授業の「高齢者のイメージ」の回答における頻出語の上位は、最も多い方から、「高齢」87回、「思う」42回、「人」24回、「イメージ」19回、「感じる」18回、「多い」18回、「社会」17回、「介護」16回、「生活」13回、「自分」11回、以下「経験」「支援」「知る」「分かる」「学ぶ」「持つ」が8回である。これらの頻出語からも取捨選択を検討し、調査①と同様に、「人」「多い」「イメージ」「自分」「思う」「感じる」を使用しない語として設定した。

調査②では「社会」が17回と増えていた。「社会的弱者であると感じた」「高齢者が社会的な制度で色々守られているのがすごいなと思った」「高齢者が最期まで自分らしい暮らしや生きがいを持てる社会づくりは大切だと思います」等の意見がみられた。

2. 階層的クラスター分析

最小出現数4、方法はward法、距離はJaccardと設定し、階層的クラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。受講前の回答は8クラスター、受講後の回答からは6クラスターが確認された(図-1.図-2)。

表-1. 初回授業 高齢者のイメージに関する回答 頻出語(4回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
生活	17	散歩	7	様々	6	考える	4
必要	16	趣味	7	活動	5	行動	4
高齢	14	人生	7	健康	5	合う	4
体	14	大変	7	言う	5	腰	4
介護	12	知る	7	考え方	5	仕事	4
弱い	12	知識	7	子ども	5	少ない	4
病気	12	頑固	6	耳	5	食事	4
悪い	10	気	6	社会	5	衰え	4
元気	10	強い	6	接す	5	世代	4
認知	10	支援	6	難しい	5	生きがい	4
好き	9	周り	6	豊富	5	大きい	4
持つ	9	身体	6	違う	4	動く	4
足腰	9	生きる	6	会話	4	変える	4
優しい	9	祖父母	6	楽しむ	4	歩く	4
増える	8	低下	6	経験	4	良い	4
話す	8	忘れ	6	見る	4		

表-2. 最終授業 高齢者のイメージに関する回答 頻出語(3回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
高齢	87	支える	6	守る	4	環境	3
社会	17	受ける	6	身体	4	機能	3
介護	16	授業	6	衰え	4	苦しい	3
生活	13	人生	6	生きる	4	見る	3
経験	9	制度	6	体	4	講義	3
支援	9	方々	6	利用	4	合う	3
知る	9	サポート	5	良い	4	施設	3
分かる	9	印象	5	地域	4	世代	3
学ぶ	8	活動	5	日本	4	精神	3
持つ	8	考える	5	認知	4	大きい	3
サービス	7	生きがい	5	年	4	知れる	3
存在	7	増える	5	勉強	4	病気	3
知識	7	理解	5	暮らす	4	負担	3
変わる	7	強い	4	マイナス	3	法律	3
悪い	6	弱者	4	楽しい	3	面	3

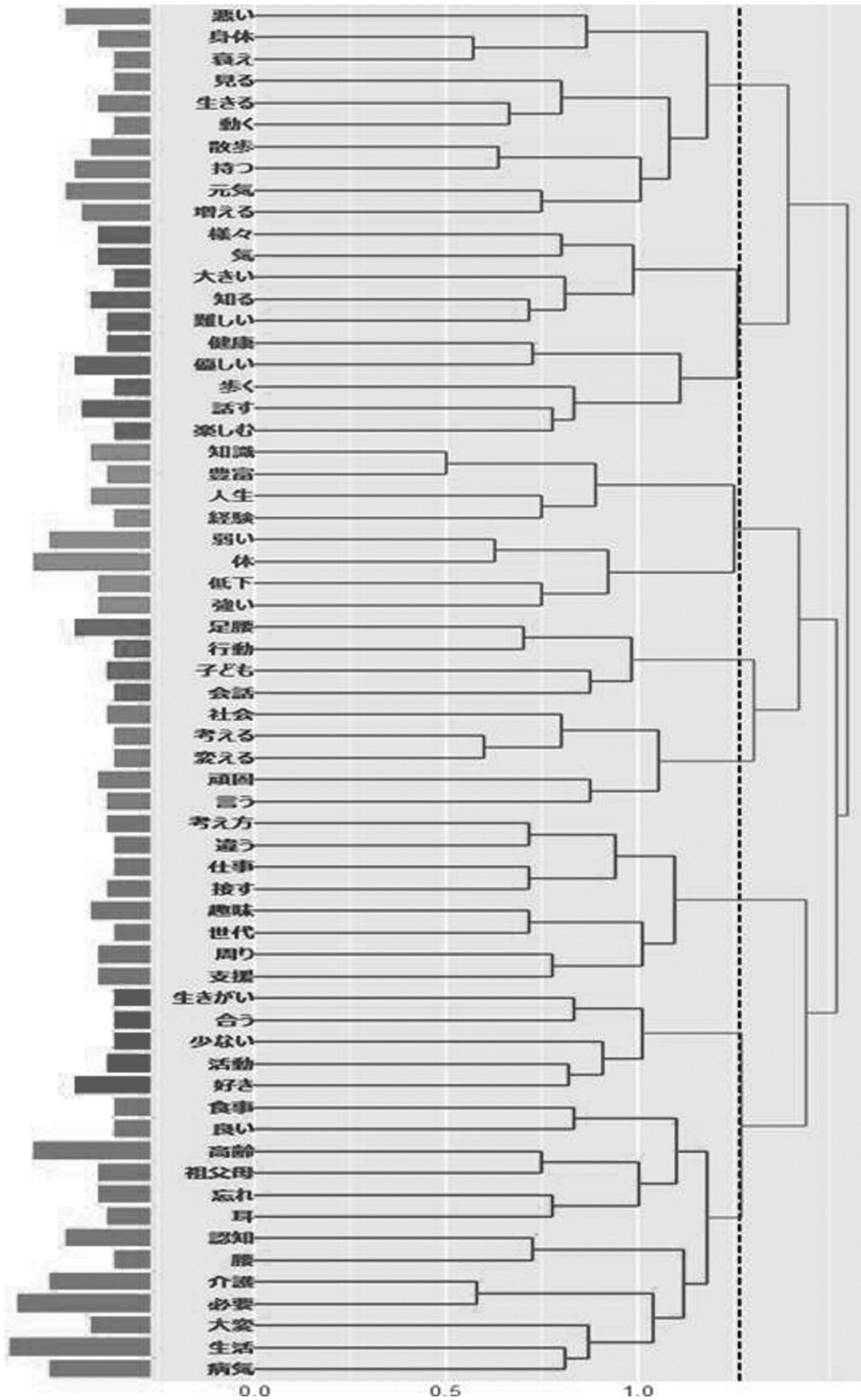


図-1 初回授業 高齢者のイメージのデンドログラム

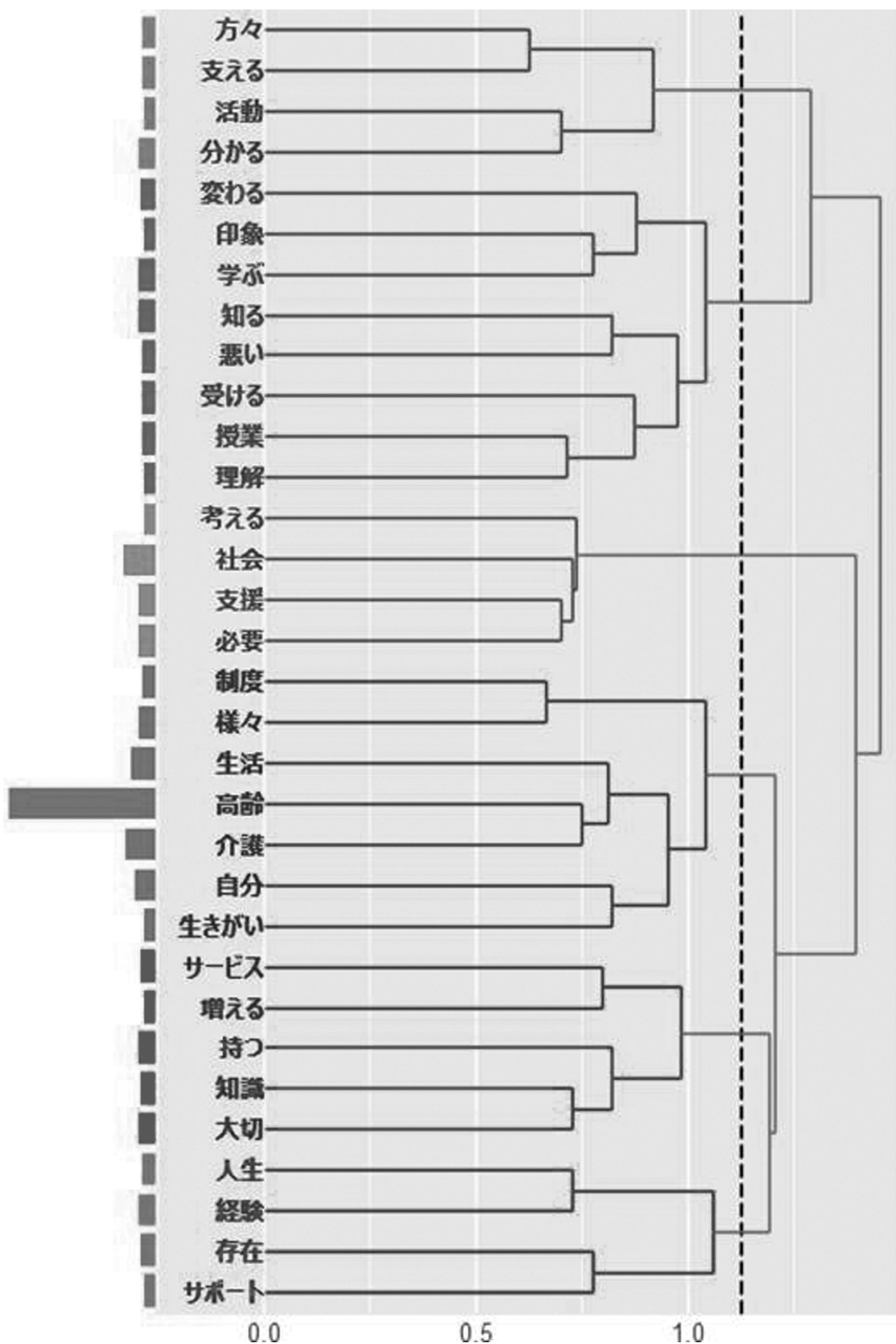


図-2 最終授業 高齢者のイメージのデンドログラム

3. 共起ネットワーク

抽出語の出現頻度と抽出語同士の関連性を確認するために、共起ネットワーク図を示した。共起ネットワーク図では、ある語と他の語が同時に使用（共起）されることを視覚化した図であり、強い共起関係は太い線となり、使用頻度が高い語であれば大きな円が描かれ、記述内容を読み解くことや語句同士の関係性の理解がしやすい。最小出現数を4、最小文書数を1、Jaccard係数を0.2以上に設定し、強制抽出語の共起ネットワークを作成した（図-3.4）。

入学直後の高齢者のイメージには祖父母の影響が大きいこと（Subgraph 7）、高齢者を身体的側面ととらえ（Subgraph 3）、「足腰」「体」が「悪く」なり、運動機能に「低下」が起ること、「身体」に「衰え」が出るイメージを抱いていることが示された。一方で高齢者に「強い」イメージもあり、身体面だけではなく、気が「強い」、個性が「強い」、我が「強い」等の記述もみられた。また、高齢者は「散歩」をし「元気」なイメージがあるが、状況がかわれば「介護」が「必要」であるとイメージしていた。

また、Subgraph 4では、「人生」の先輩であること、人生の「経験」や「知識」が「豊富」であるイメージを持っていることを示している。また、高齢者は「歩く」イメージ、「趣味」や「話す」ことを楽しむイメージがあることが示された。

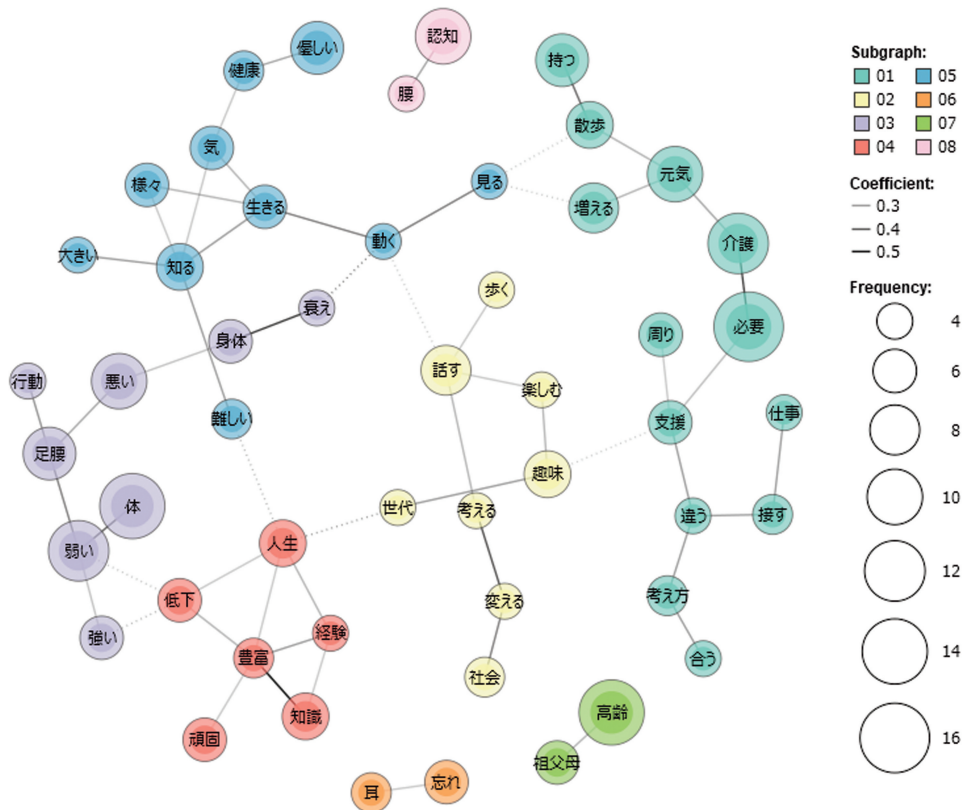


図-3 初回授業 高齢者のイメージ 共起ネットワーク

つづいて、調査②（最終授業）の回答の共起ネットワークをみてみたい。調査①（初回授業）の共起ネットワークで「高齢」は「祖父母」と共起の関係にあった。しかし、調査②（最終授業）は「高齢」は「介護」「生活」と共起関係にあり、それぞれ「弱者」「守る」、「生活」「身体」(Subgraph5)へとつながっている。また、Subgraph2では、「人生」には「生きがい」が求められ、高齢者特有のこれまでの「経験」による「知識」を「持つ」ため、「地域」「活動」(Subgraph1)を行っていると解釈できる。その他、Subgraph3では、「良い」「暮らす」は「社会」につながり、高齢者の生活を「支援」することを「考える」思いを持っていることを示している。

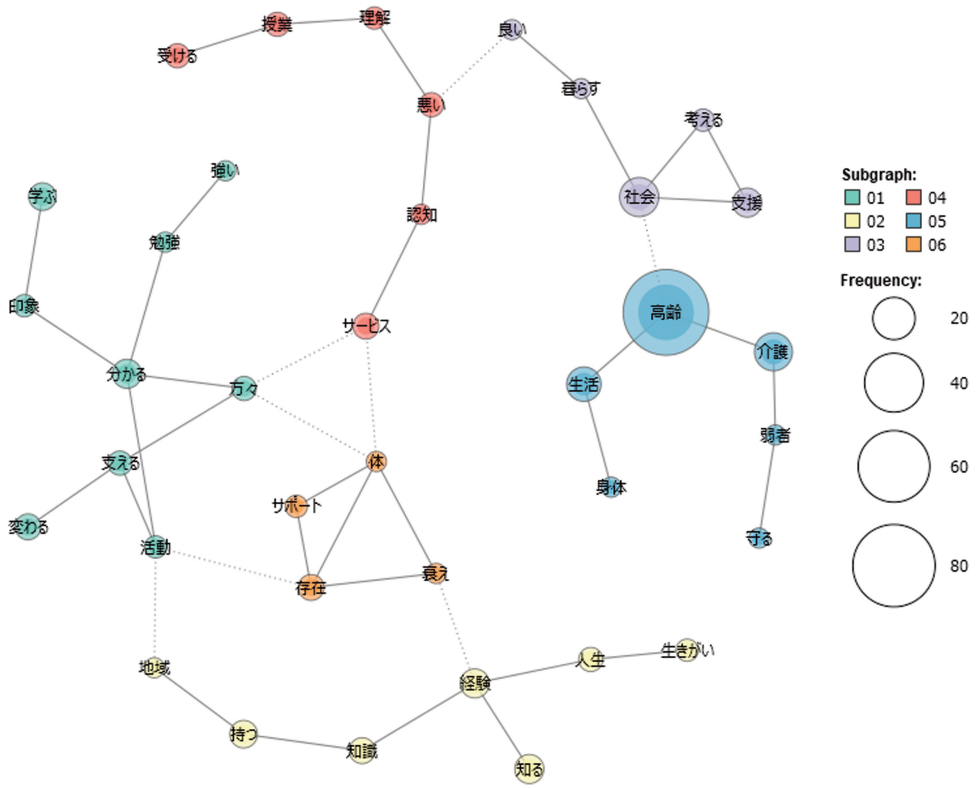


図-4 最終授業 高齢者のイメージ 共起ネットワーク

V. 考察

初回と最終授業の高齢者のイメージについての上位頻出語を比較すると、初回の授業では「人」「多い」「イメージ」「自分」「思う」「生活」「必要」「高齢」「体」「介護」「弱い」「病気」「悪い」「元気」「認知」「好き」「持つ」「足腰」「優しい」であり、祖父母や身近な高齢者の身体的な特徴のイメージが強いことが示された。

最終授業の「高齢者のイメージ」の回答における頻出語の上位は、「高齢」「思う」「人」「イメージ」「感じる」「多い」「社会」「介護」「生活」「自分」「経験」「支援」「大切」「知る」「分かる」「学ぶ」「持つ」「必要」「様々」「サービス」であった。社会において高齢者に対する支援やサービスの必要性に触れた文章が多くみられた。初回授業のような身近な高齢者の印象からの回答ではなく、社会における福祉サービス利用者としての高齢者の捉え方へと変化したことが窺えた。これは授業において介護保険制度をはじめ、高齢者施策に関してくり返し時間をかけて学んだことが影響しているのではないかと推察された。

具体的には、入学直後の学生の記述から、これまで祖父母等との同居や、地域活動等で高齢者と触れ合ったことはあったが、高齢者の存在について深く思考する機会はなかったことが推測される。大学の講義において、高齢期になるとどのように人の生活が変化するのか、なぜ変化するのか、その背景にある心身機能の変化や認知症の発症、要支援になった際に高齢者の生活を支える制度とその仕組みについて学ぶ機会を初めて持ったと思われる。学生は高齢者の心身機能や認知症に関しては別科目で専門的に学ぶこととなっており、また時間的な制約から簡潔にしか触れることはできなかった。しかし、少なからず高齢者を知ることにはつながったと思われた。

対人援助職を目指して入学し授業に参加し、緊迫した少子高齢社会の現状や高齢者に関する福祉制度を学ぶ中で、自分に関係のなかった社会の問題が身近なものと感じられ、支援者の視点で社会の現状を見ることや、福祉サービス対象として高齢者を捉える視点を初めて持つに至ったのではないだろうか。学生たちは同時期に障がい者の福祉制度も学び、その他いくつかの福祉に関する科目も受講している。初めて福祉領域の学習をする中で、他の科目の学びも踏まえながら福祉対象者を理解していく側面もあるのではないかと考える。

本研究では、学生が授業を通して福祉対象者に対する具体的なイメージを持つことについて確認できた。これらは、今後実習等において直接コミュニケーションを行い、支援の体験をする中で、さらに対象者に対するイメージが具体化、深化、または個別化していくことと思われる。

記述を読み込んでいくと、祖父母等との同居の体験によって、高齢者にマイナスのイメージを抱く学生も一定数いることが明らかになった。1例挙げると、授業前の回答に「私の両親も祖父母を介護していて、物忘れや耳が遠くてコミュニケーションを取るのが難しいと感じることが多くあります。高齢者と聞くと、祖父母を思い浮かべるので、『大変』『病気』『介護』といったイメージがあります」とあった。家庭における祖父母の介護負担や、同居生活において良好とは言えない人間関係等があるのではないかと推察された。日本では核家族化が進み、三世代世帯が以前に比べ激減している。高齢者の夫婦のみ、また単独世帯が増える中で三世代世帯は貴重であり、高齢期に介護の担い手の心配が少ないという見方が存在している。しかし、実際に介護の負担が大

きければ、家庭生活において何等かの問題が生じることや、それを見聞きする若者の高齢者観にも影響することが示唆された。

一方で、上述した記述例文の続きに、「祖父母から学んだことがたくさんあるので、『人生の先輩』というイメージもあります」という肯定的な記述がみられた。つまり、学生はこれまでの生活の中で祖父母に触れ、肯定的・否定的と両義的な印象を抱くのだと考える。これもまた現在の学生の高齢者観につながっているといえよう。

なお、世代の違いによる価値観のずれを感じているという記述もみられた。授業において深く触れることができなかったが、他世代の価値観を学び認め合っていくこと等も、これからの超高齢社会において高齢者がいきいきとその人らしく生活するためには必要な視点であると考えられる。

高齢者は健康で自立した生活を送る高齢者から寝たきりの生活を送らざるを得ない高齢者など、その生活実態は様々である。それゆえ、高齢者のイメージも本来は多様性に富んだものであることも忘れてはならない。山崎ら(2018)が、専門性を高めていくことが高齢者への偏見やステイグマを強める可能性があることを述べている。学生が高齢者を支援を必要とする存在としてだけで捉えることがないよう意識し教育を行う必要があると考える。

VI. おわりに

本研究では、福祉・心理を学ぼうとする大学生1年次生の高齢者福祉の授業において、授業前後の高齢者のイメージはどのようなものか、また授業前後のイメージの変化について分析を行った。その結果、初回授業、最終授業とでは記述内容に変化がみられた。分析の結果を踏まえて、あらためて学生の高齢者観を発展させる必要があることを考えると、実習指導や実技演習等の体験型授業だけでなく講義形式の授業であっても、その内容は受講学生に影響があるため、教員は学生の高齢者観を育むという視点を意識することが重要であると考えた。今後、対人援助職を目指す学生の高齢者観の深まりを目指す教授方法等について検討を行うことを今後の課題としたい。

謝辞

今回、調査にご理解・ご協力いただきました学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 統計局 統計トピックスNo.132「統計からみた我が国の高齢者 1.高齢者の人口」<https://www.stat.go.jp/data/topics/topil321.html> 2022年9月24日閲覧
- 大杉あゆみ・飛永高秀・山頭照美「対人援助職を目指す学生の福祉サービス利用者への認識に関する研究：本学地域包括支援学科の学生のアンケート調査から」『純心現代福祉研究』26,17-31,2022
- 岡本麗子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり, 高岡徹子「老年看護学における看護学生が捉えた高齢者イメージの変化—2年次から3年次の分析を中心に—」『北海道文教大学研究紀要』35,65-74,2011
- 桑田恵美子, 山本和江「老年看護学実習を通して看護学生が捉えた高齢者観(第1報)」『研究紀要 青葉』13巻2号, 103-111,2022
- 金原京子, 小川宣子, 田中真佐恵, 吉井輝子, 松田千登勢「早期体験型の老年看護学実習における看護学生の学びの様相—実習前後での高齢者イメージ・高齢者観に焦点をあてて—」撰南大学看護学研究6(1),42-49,

2018

樋口耕一「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法19(1)』101-115,

2004

三輪のり子, 金原京子: ゆとり世代の看護学生における高齢者観の特徴「普段みたり聞いたりする像」「将来なり
たい像」「将来なりたくない像」「自分にとっての存在」の視点から読み解く. 老年看護学 Vol.19, No.2,
47-57, 2015.

山崎さやか, 黒田梨絵, 三木貴美子「老年看護学概論受講前後における看護学生の高齢者観の変化」『健康科学大
学紀要』14号, 217-229, 2018